

市長と語ろう！大学生世代ミーティング【概要】

平成27年11月29日(土)

10時～11時30分

子ども未来センター201・202会議室

1 開会の挨拶

(市長)

おはようございます。日曜日の午前中ということで、若い皆さんにとってはゆっくり寝たいような時間かなと思いますが、お出かけいただいて、大変ありがとうございます。

これまで若者世代とのタウンミーティングというコンセプトはありましたが、大学生世代の方を対象にしてのタウンミーティングというのは初めてです。

なぜ今まで、それに気がつかなかったのかなという思いです。立川に訪ねてきてくれる世代の中で、大学生世代の方も大変多くいます。八王子市ですとか日野市とか、立川市を取りまく周辺の自治体に、大学がたくさんあります。立川に大勢の若者、とりわけ大学生が大勢来てくれる、そして立川に住んでくれる学生が多いという話は聞いていまして、なぜ今までこのことを思いつかなかったのかなと思いながら、今、反省をしているところでございます。

そんな中、これからの未来について、立川のまちをどうしていこうかということであります。立川の位置づけというのは、皆さん、「地方」でしょうか、「中央」でしょうか。国の政策の位置づけの中では「地方」です。多摩地域は「地方」です。

国立社会保障・人口問題研究所、いわゆる社人研という機関の調査結果によりますと、立川市も2060年には、現在の18万の人口が13万人ぐらいに減ってしまうだろうという推計が出ております。日本全体の人口が減っていきますからこれはやむを得ないとは思いますが、立川市の人口減少率を最小にとどめて、そして人口減少をストップさせることは、市民が安心して住んでいけるということにつながります。

高齢化の問題についても、立川市の現在の老年人口比率というのはおよそ23パーセントで、2060年にはこれがおおよそ40パーセントと人口の3分の1以上が65歳以上の高齢者となると推計されています。アイデアを出しながら、これをどうとどめていこうかということが、今後の、最大の課題であると思っています。

他にもいろいろな統計をとってみましたら、20代から30代の人が立川から転出していく傾向が如実にでております。特に25歳～39歳ぐらまでの女性が転出していく傾向が非常に強い。理由はよくわかりません。ああでもない、こうでもないという推測は立てていますが、なかなかはっきりしたことはわからないから悩みなのです。

ぜひ、皆さん方の若い世代が、どう考えていて、どう行動して、あるいは自分の人生の価値観は那邊にあるのか、それによって立川のまちづくりの大きなヒントを皆さんからいただきたいという思いで、今日のこのタウンミーティングは、大学生世代の皆さんにお願いをさせていただきました。よろしくお願いいいたします。

2 意見交換

(司会)

立川市の人口、5歳階級別転入・転出、純移動数の状況によりますと、男性・女性ともに25歳～29歳は東京23区へ、35歳～39歳は多摩地域への転出者数が多くなっております。その理由や原因について考えられるものは何だと思えますか。

(参加者)

大学卒業や就職などによって都心の流出が多いのではないかと思います、それに対して卒業しても住みたいと思ってもらえるようなまちづくりが必要だと思います。

「自然が豊かという場所であれば、都心よりもやすらげる。」という考えを持てば、立川市に住みながらにして都心で働くというスタイルが生まれるのではないかと思います。

また、立川市には国立音楽大学がありますが、その大学の卒業生が、引き続き立川市で音楽に携われるようなまちであったら、その卒業生たちも立川市に居続けて「音楽都市立川」というものができるのではないかと考えております。

(市長)

今、私としては重要なご意見があったような気がします。自分が生活する、日常生活をする上では、にぎやかな都心というよりも、緑が豊かで、やすらぎを感じられる地域に住みたいですか。

(参加者)

私は都会の喧騒よりも、自然があったほうが良いと思います。休日もそこでリフレッシュして、仕事のときは都心に行くような。

(市長)

なるほど。例えば、あなたの職場が大手町にあったとします。自宅を出て、ドア・ツー・ドアで、どのぐらいの通勤時間だったら許容の範囲だと思いますか。

(参加者)

1時間～1時間半程度ですね。ほかの皆さんがどう感じるのかというのは、わかりませんが。

(市長)

ありがとうございます。

それと、国立音楽大学は、立川市内で唯一の大学です。連携・協力に関する協定も結んでいまして、国立音楽大学と立川市の共催で、毎年たましんR I S U R Uホールでのコンサートや、月に一度、立川市役所のロビーの中でコンサートをやっています。

それから東京女子体育大学は市内に学生寮があるなど関連性が高いものですから、こちらも連携協定を結びまして、いろいろな形で交流しております。

(企画政策課長)

通勤時間はどのぐらいまでだったら許容範囲か、聞いてみたいのですが、よろしいでし

ようか。

やはり1時間程度という方が多いですね。ありがとうございます。

(参加者)

若い世代は通勤に便利な23区内に流出するというのは、私も同じ意見です。35歳～39歳の流出につきましては、住居が賃貸から分譲へ移転するからではないかなと思いました。

先ほど通勤時間は1時間半ほどが許容範囲という方がいらっしゃいました。私のイメージとなってしまうのは申しわけないのですが、JR中央線は非常に混雑がひどいイメージがあります。私は、多摩市に住んでおまして、ふだん小田急線を利用していますが、JR中央線での1時間半と小田急線や京王線での1時間半はかなり質が違うのではないかと思います。また、JRにはホームドアがないので非常に怖く、そうした状況にかなり左右されているのではないかと思います。

立川市は、西に八王子市があって、そちらからもたくさんの方が中央線に乗ってきます。やはりそういうところが少し気になるのかなと思います。定住するならもう少し混雑の少ない多摩市や、立川市より外側の八王子市のほうに定住するのではないかなと思いました。

(市長)

立川はいわゆる大会社の支店等が多いです。また、昼夜間人口比率が1を超えている都市は多摩地域で2市しかない。武蔵野市と立川市だけです。立川市の昼夜間人口比率は1.13です。

しかも、昼夜間人口比率を算出するにあたっての国勢調査に反映されるのは、学校とか会社とかいわゆる登録してある人だけです。観光客や買いもの客などはカウントしていません。それをカウントしますと、立川市には人口の2.3～2.5倍、40万人超の人が滞在しているだろうという推計が出ております。

ですから、土地が高いのです。土地が高いということは税金も高いということにつながりますので、そういう面ではJR立川駅周辺は厳しいです。今、立川駅の西側に高さ約130メートルの32階建て再開発ビルを工事してしまっていて、いわゆる億ションであると言われております。そうはいいながらも即日完売でした。人気のある部屋は抽選だったそうです。高いけれども人気がある。だから、そこら辺がなかなか難しいところです。

それともう一つ、駅にホームドアがないことと、それから中央線の通勤です。40年前、50年前と同じ状況です。私は学生のころ、水道橋まで通っていましたが、やはり満員電車、自分のかばんを手から離しても下に落ちないと言われたぐらい大変混んでいました。今でも私は、霞が関で9時から会議ですと、大体7時過ぎぐらいの中央線に乗らざるを得ないのですが、ものすごく混んでいます。

中央線は立川までほとんど立体化しました。中央線の計画は、高架複々線化という事業です。立体化だけではなくて、複々線にするという都市計画決定がもうできています。三鷹までは総武線が来ています。ですから三鷹から立川まで複々線化するための計画はでき上がっています。三鷹から地下へもぐって西国分寺で駅の上に出て、さらに西国分寺からまた地下をもぐって立川に来るといって都市計画決定までされています。

あとは予算の問題で、JRと国がどうバックアップしていただけるかということです。この点については、私も毎年毎年、国やJRに陳情活動に行っています。立川市独自でも

行っているし、周辺の市町村等で三鷹・立川間立体化複々線促進協議会という団体をつくっています。毎年毎年お願いをしているところです。

ホームドアにつきましてもJRや国に毎年お願いに上がっています。なぜ遅れているかというと、中央線は、特急「あずさ」や各駅停車の電車などいろいろなドア数の電車がとまります。そのため、拝島駅でホームドアをどうやってつけたらいいのかという実証実験をしています。JRのほうも、一番危険で混雑しているのは立川駅と承知しています。確かに安全性の面から、ホームドアは必要だと思っています。

(司会)

市長からの質問の2番目になります、立川市の休日の滞在人口率は2.37倍と、多摩26市では武蔵野市の2.53倍に次ぐ高さになっており、多くの人を訪れるまちとなっていますが、滞在人口の流入上位5市と立川市を合わせた人口は2020年ごろには減少に転じると推計されております。立川市が多くの人を訪れる魅力的なまちであるために必要なものや課題は何かという質問でございます。

(参加者)

例えば12月に「ららぽーと立川立飛」ができる、立川市といえば「ららぽーと」みたいな、そういうものがあつたほうが、休日に人が来るんじゃないかなと思います。

今、私は地方自治体のことを勉強していますが、立川市に住んでいる人たちがこれからこの立川市をどういうまちにしたいというのが、一番重要だろうと思います。

例えば、立川市といえばあれというものが特になくても、住んでいるよという人もいらつしゃいます。立川市のホームページに「にぎわいとやすらぎの交流都市 立川」と書いてあつたのですが、いろいろな考えがあつてこのワードを選んだと思います。

そのビジョンを、お尋ねしたいと思います。

(市長)

もっと率直に、遠慮しないで、「にぎわい」と「やすらぎ」とは、矛盾しているじゃないかと、言ってもらつて構いません。実は、あえて矛盾したワードを、示しております。

立川市の土地は逆L字型です。南には東西に多摩川が、北には東西に玉川上水が流れています。南のはじと北のはじに東西に、有名な水路、川が流れています。そしてその真ん中を南北に縦貫しているのが一級河川の残堀川です。

実は、立川のにぎわいはJR立川駅を中心とした約1キロメートルしかないです。立川には農村風景がたくさん広がっています。多摩26市の中で、農地が3番目に多いです。約290ヘクタールあります。

植木畑が多く、東京でナンバーワンの植木生産本数を誇るまちです。植木がものすごく多くて、緑豊かに感じることでできるまちです。「にぎわい」と「やすらぎ」とはこういうことです。

先ほども出ましたが1時間半かからないで都心まで通勤できます。バスに15分ぐらい乗つて立川駅に来て、立川駅からJR中央線で30、40分で都心まで行けます。

また、日本を代表するような企業の本社などは、立川にはほとんどありません。中小企業、あるいは大企業や金融機関の支店、出張所などはたくさんあります。デパートも、伊

勢丹や高島屋があります。それだけのにぎわいが、立川のまちにはあります。

それから、立川駅の北口のパレスホテルのすぐ西側のところにA2、A3地区という広い土地があります。あの土地は、立川市の独自の地区計画の網をかぶせてあり住宅はできません。なぜ住宅はできないかという、住宅からはほとんど税収が上がらないからです。市の経営の面から言えば、駅の直近の超一等地にあまり税収が上がらない住宅を建ててはしくはないです。駅の直近400、500メートル以内にあるところに、積極的に市として住宅を建てる、あるいは大規模な住宅建設を許可するつもりはありません。超一等地であるにぎわいの中に、静かでやすらぎを求めるような住宅をつくる必要はないです。JR立川駅から1キロ離れば、静かな緑あふれる住宅地があるので、そちらを選んでいただきたい。そういう、基本的な考えでいます。

立川がこの先、生きていくのには何が必要かと言えば、これは「交流都市」です。要するに、大勢の人に立川に来てもらうという都市を目指していきます。

そのための大きな資源が、ファーレ立川の109体のアート群です。これからこのファーレ地区のアート群を立川の宝物として、さらに情報発信をしていきたいと考えています。

そして、立川駅の北口と南口のデッキの上に無線LANを敷設します。「交流都市」として、お客様を大勢呼ぶためのしつらえをやっていければと思っています。

(参加者)

私たち4人は大学の同じゼミで勉強しておりまして、今年度は立川市に来街された方や、立川に関連の強い大学の学生などにアンケート調査を行い、立川にどんなものが必要かや、どんな目的で来街しているかを調査しました。何点か、説明させていただきたいと思えます。

まず、来街目的を聞いたところ、やはり、買い物目的で来られる方が多かったのですが、買い物という目的で回答された方が、ほかの食事や娯楽、喫茶、あとは昭和記念公園と一緒にいきますという結果が出なくて、買い物目的だけという人がすごく多いです。買い物に来る人はすごく多いのですが、ほかの目的との関連性がないという結果になっています。これは非常に残念なことでありますが、その分伸び代があると感じています。

次に、立川市の満足度を調査しました。「教養・文化・芸術の場」について満足度が低い結果になりました。そのため私たちは、コンサートホールや体育館、博物館といった子どもたちが楽しめる場所というのが、もっとあったら良いのではないかと考えました。

また、「談笑できる場所」というところが少なく、特に若い世代においてフリースペースというのを求める声が多くです。「立川市って若者が集まる場所ってイメージないよね。」というところで、そういった場所がもっとあれば、いろいろな新しい企画だとか動きというのが生まれてくるのではないかと考えております。

そして最後に、温泉やマッサージといった「癒やしの場」というところに関してもすごくニーズが高いです。夜遅くまでそういった施設を利用できるような場所があれば、もっといろいろな世代の方の交流の場所にもなるし、魅力的なところがつくれるのではないかと感じております。

(市長)

「教養・文化・芸術の場」のお話と、それから「癒やしの場」として温泉など滞在できる

ような施設ですが、A3地区という1ヘクタールの土地にはいわゆるエンターテインメント系の用途でなければ許可できませんということで、おそらく「教養・文化・芸術の場」と「癒しの場」は、かなりの部分が満たされるのではという期待も持っています。

それから、来街者の目的ですが、私は買い物客がもっと食事とか、娯楽などへ流れてくれているのかなと思いました。これはもう少し、商店街の調査等をきちんと精査をして、滞在時間を延ばすためのしつらえの努力をしていかなければいけないなと思っています。

フリースペースですが、この子ども未来センターはフリースペースとして使うことができます。

今、立川駅の西側に幅約10メートルの自由通路を新たに作っています。ここに約30メートルの円形の公開広場をつくります。ほかのデッキの部分は、道路交通法上、道路扱いのため、基本的にはものを売ったり、あるいは路上ライブをやったりということはできません。ところがこの広場ですとできます。しかも楽器が濡れたりしないように、一部、屋根をつけました。これが使い方によっては、フリースペースの役割を果たしてもらえるのではと期待しております。

(参加者)

今、フリースペース、オープンスペースの話がありましたが、多摩地域の大学生同士での集まりも、なぜか新宿でやったりしています。

せっかく多摩地域の大学はたくさんあるのに、多摩地域の中で集まれるスペースがない、もしくは知られていないという状況です。立川は交通が便利で、東西南北どちらへも行けるという集まりやすい条件ではピカイチだと思うので、ぜひそういった施設ができると思います。

(市長)

それは気がつかなかったです。みんな新宿ですか。それでは私の学生のときと同じですね。大いに参考にさせていただきます。

(参加者)

私あまり立川を訪れない理由としては、特にモノレールが高いことです。明星大学、中央大学、帝京大学等からでしたら、途中の高幡不動や、反対の多摩センターでいいんじゃないかと思います。立川に行くなら、それこそ新宿に行ったほうが電車賃も変わらないし、いろいろなものがありますし、ミーティング等もできます。やっぱりモノレールの料金ですと新宿に行ってしまうとか、別の場所で決めてしまうという人も多いと思います。少しでも安くしてもらえないかなと思います。

(市長)

これも、盲点をつかれた気がします。実は、私は多摩都市モノレール会社の役員です。

4年前から周辺の5つの自治体が支援金を出して、やっと黒字になったわけですが、まだ累積の借金が600億円ほどあり必死になっているところです。

実際、日常使っているとばかにならないですね。そういう声もあるということ、きちんと、次の役員会では議論します。

(司会)

立川市地方創生に関する住民ニーズアンケート、市内在住20歳～44歳の男女の結果におきまして、立川市に不足していると思う居住環境として、「治安」「地域コミュニティ・近所づきあい」を回答した割合は、若い世代ほど高い傾向になりました。大学生や若者の皆さんが地域コミュニティとかかわるための課題や皆さんにできること、また市に求められることはどのようなことだと思いますでしょうか。

(参加者)

地域コミュニティと商店街という観点からお話をさせていただきたいと思います。

魅力的なまちを形成するうえで私が大事だと思っているのは、コミュニティといいますか、そこに自分の居場所があるということだと思います。それに関して重要であるのが商店街であるという考えなのですが、私が昨年、インターンシップの研修で訪れた品川区の戸越銀座という商店街は、東京の中でも非常に成功した商店街として、事例として参照されています。実際そこで感じたことは何かといいますと、大学生ですとか、そうした若者が、商店街の活動に積極的に参加するという環境であるということです。すなわち、商店街というのが、そうしたコミュニティを形成するに当たっての入り口として機能しているのではないかということになります。

以前の、コミュニティの政策的な観点からいいますと、建物さえつくっておけばそこにコミュニティは形成されるものというのが一般的な考えだったのですが、近年になりまして、そうしたことはあまり効果的じゃないといいますか、むしろそういった建物ではなく、ソフトとして、コミュニティをつくるために積極的に努力をしていかなければならないということを言われています。

今までのお話では大型の、いわゆる箱物的な開発が目立ってしまって、その点に関しましては、例えば商店街、私が見た戸越銀座のブランディング、つまりその地域が積極的に自身から発信していくような商店街の姿勢といったものが需要だと思います。市政としては、商店街に関してどのような支援を行っているのかということをお伺いしたいと思います。

(市長)

商店街については、魅力的でこれだと思う商店をピックアップして表彰する制度や、商店街と創業者と一緒にアイデアを出して、良いアイデアの事業資金を支援するコンペ、それから、必要な店舗改装資金や運転資金融資の利子補給制度など、さまざまな支援を実施しています。

一番の悩みは、後継者不足です。実は、立川の皆さんの流れというのは、貸家業に大きな流れが移ってしまっています。オーナーさん自身が商店を経営ということではなくて、場の提供をすることによって、テナントさんに入ってもらうような、そんな大きな流れがあります。なかなかこれがとまらないです。

そんな流れの中で、どう創業者を支援していくかというのが最大の課題です。市としては、創業者のための支援策を商業支援の中では大きなウエートでやっています。しかし、なかなかこれといった解決策が見つからないという状況であるのは確かです。だから、悩

んでいます。

なかなか地域商店街の逆転満塁ホームランは打ちづらいなという状況にあります。
戸越銀座は素晴らしいです。私も何度も行ってよく知っています。

(参加者)

地域コミュニティに関してです。例えば小学校や中学校は、学区という区割りを利用して、駅前や公園のごみ拾い、またラジオ体操という形で、若い世代を地域コミュニティに巻き込んでいくという活動ができていると思っています。しかし大学生やもう少し上の若い世代になると、それが非常に難しいとされていて、その世代をどう巻き込んでいくかという問題だと思っています。

現在私たちは、日本の食品廃棄を減らそうという形で、外食の食べ残しを持ち帰ろうというプロジェクトを推進しています。その一環として、立川市のごみ対策課にインタビューをお願いしたところ、本当にご協力をいただきまして、今、一緒にプロジェクトを進めているところです。

その一つとして、11月7日と8日に行われた「たちかわ楽市」で、ブースを共同出店しました。そういった活動を通して、私たちも立川の市民の方々と交流する機会をいただき、本当に貴重な生のご意見をいただくことができました。私たちは八王子に住んでいますが、この2日間で、立川市に対して何か親近感というか、愛着のようなものも湧いてきた部分もあります。このように、昨今、学生でプロジェクトを行うという団体もたくさんありますので、市役所からアプローチをかけていくのも、非常に大事だと思っています。

(参加者)

このことに付随してなんですが、一定数の若い方が地域コミュニティに参加していると、ほかの若い世代も参加しやすいと思います。

大学生の取り組みといったプロジェクトを地域コミュニティで行いたい、もっと広げたいという要望をかなえていただけるような、何か共通の窓口のようなものがあるとさらにいいというのが、私たちの考えです。

(市長)

「たちかわ楽市」出店ありがとうございました。食品廃棄は私も常々もったいないなと思っています。まさにそのとおりで、皆さんに風穴を開けてもらったので、これは今後、きちんと取り組んでまいりたいと思っています。

また、いろいろな形で、地域のまちづくりやあるいは地域支援に動きたいので、共通窓口があればということですが、これは早速確認をとります。

3 閉会の挨拶

(市長)

1時間半の時間がこんなに短く感じられて、あっという間に終わってしまったなという感じがしております。

私たちが、行政の面でなかなか気がつかなかったご提案もたくさんいただきました。改めてお礼を申し上げます。

初めての大学生世代ミーティングでしたが、本当に大成功であったなと思っていますし、ぜひこの大学生とのタウンミーティングは来年度以降も続けていきたいと思います。ぜひ、後輩にもバトンタッチしていただいて、このミーティングに参加していただければありがたいなと思っています。

本当に、楽しい時間をありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。